

2002年3月26日

2002年3月25日 日本テレビ会長社長定例記者会見 要旨

1. 8年連続年度4冠王達成の要因と9年連続への見通し

記者：8年連続の4冠王確定ですが、結果をどう受け止めていらっしゃるかということと、9年連続の見通し、また4月の新番組のことも含めてお話をいただきたいと思います。

萩原社長：8年連続の年度4冠王というのは、まだ1週残しておりますけども、これは大丈夫だと思います。3冠王取れたのはとりもなおさず、レギュラー番組が強かったということです。とくに7時台、8時台のレギュラー番組が好調でした。朝の改編などかなり大きな改革に取組みましたけれども、少なくともズームインは、歯止めが掛かったと思います。

それから、バレーボールのグランドチャンピオンズカップ、いわゆるグラチャンが大成功しました。

問題点がまったくなかった訳ではありません。もちろん、巨人戦の視聴率の問題。いよいよ、今週から始まるのですが、不安がまったくない訳ではありません。これが大きな課題だと思います。

それから、ドラマの不振というのがですね…連続ドラマは各局ともにかなりの苦戦をしておりまして、私共だけではありませんけども、私共でもかなり手痛いミスが何回かあったという点で、やはりドラマの底上げが必要だと思います。

レギュラーの強さというのが、急にここで変わる訳は無いと思います。

ご承知の通り、土屋編成部長、五味企画担当部長、この新体制が今年の年末年始、新機軸を出し始めたと。おそらく、今度の期末期首編成もかなりそういう意味でいうと彼らの色が出ていると思います。先週、木曜日に「史上最大! 全国民が選ぶ美味しいラーメン屋さんベスト 99」というのを4時間もやりましてですね、あんな恐ろしいこと、僕が編成部長だったら多分できなかっただと思いますけど、あの2人だと平気でやるんですね。で、やって4時間で 16.8%も取るという、そういう思い切った編成というのが、そろそろ出始めている。

4月改編もそういう意味でいうと「¥マネーの虎」をゴールデンに組んだり、「知ってるつもり!?!」を「行列のできる法律相談所」に変えてみたり、かなり実践的な、ある意味でいえば大胆不敵な編成をやっています。

「峰竜太のホンの昼メシ前」をつぶして「レツツ!」も変えて、峰竜太さん、そ

れから麻木久仁子さんという強力なコンビで、朝の新番組を立ち上げるというような、そういった彼ららしいやり方が功を奏すると思います。まあ、順当に行けば、よほどのことでもない限り、9年目も大丈夫だと思います。我々はあくまでも、フジテレビがやった11年間を上回る12年連続というのを、とりあえずの目標に置いてますので、9年目あたりにつまずいたら、どうしようもありません。

記者：よほどの事って、どんなことですか？

萩原社長：それは、巨人戦視聴率がシングルとかね。ワールドカップはしかし、どんなに行っても1試合ですからね、本当にすごい数字が出るのは。多分日本・ロシア戦だと思うんですよね。あれが、60%行くのか、70%行くのかわかりませんけど、1試合ですから年度とか年間にはそれほど影響があると思いません。それが大きく1着2着の順位に影響するということは無いと思います。4月改編、ドラマは随分變りますけど、バラエティーに関しては各局そんなに大幅な変更は無いようですね。一見、新番組ってうたってますけれど、実際タイトル変更してリニューアルみたいな番組多いですからね。レギュラー番組でね、急に逆転をくらうというのは、常識的には考えられません。

2. プロ野球、今週開幕、G戦中継への取組みと見通し

記者：いよいよ巨人戦始まるということで、中継のタイトルも変えたり、リニューアルと新しい戦略もあると、うかがっております。そのあたりについて。

氏家会長：今度のオープン戦の視聴率は一昨年、おととしとほぼ同じですからね。

萩原社長：ちょっと上がってます。今年が7.3%（3月25日現在の数字）、昨年は6.9%ですからね。個人視聴率的に見ると、去年に比べてティーンとF1が増えている。原監督になった時、若い視聴者の開拓をやる意味でも、若返った原政権を歓迎すると申しましたが、ティーンとF1が増えるという結果につながっています。

今年の中継に関しても、その辺は鮮明にして行きたいと思っています。去年の「8時の男」みたいなバラエティー化は避けて、グランドで展開されるプレイを忠実に伝えていきたいと思います。解説に水野さんを入れまして、これも若い世代の視聴者を考えてのことです。例えばテーマソングに浜崎あゆみを起用する。

エンターテインメント化する気はありませんけれども、原監督をバックアップする工夫を凝らしています。

中継上でいうと、2塁と3塁の結んだ線上、つまり3塁側にカメラを置きます。よく、野球は3塁打が1番面白いといいますよね。2塁から3塁に突っ込んでくるランナーが真正面から見えるところに、カメラを置きたいということがあったんですね。

まあ、奇をてらうようなことはやりませんけれど、CGを使ってその選手の理想的な投球なり打球なりをやって、それが現在投げてる状態と比べてどうなのかというようなのは、わかりやすくやろうとは思いますね。

基本的には試合そのものを、ドラマティックに伝える中継というようにして行きたいと思っています。

記者：ジャイアンツ戦、どのくらいの視聴率を期待、あるいは望んでいますか。

萩原社長：期待は20%ですよ当然。でも現実問題として、今の感触からして20%の平均というのは、ちょっと難しいんじゃないかなという気はするんですけど、去年を下回ることは無いと思います。星野阪神との開幕戦ということで、スタートダッシュはかなりいいんじゃないかということから考えると、去年あたりに、心配していたよりも、もうちょっと期待していいかななんて、いう感じはもってますよ。

記者：TBSがベイスターズのプロモーションで、大分お金を使ってスポットなんかを製作して流すということですが、新生原ジャイアンツの選手とか球団のPRとかプロモーションとか、そういうのは何か、あるいは番組的にささえるとか、そういったような計画は？

萩原社長：すでに、改編の発表で申し上げていると思いますが、日曜日の13時から30分間「巨人中毒」という番組をレギュラーでやります。日曜日の13時ですからかなりいい時間ですよ。その時間で30分のレギュラー番組で、スマップの中居君がキャスターで、いわゆるジャイアンツPR番組っていうのかな、バックアップ番組になっています。スポット等々もすでに出ていますけれども、今までみたいに“劇空間プロ野球”って、それだけ押しても抽象的なんで。巨人・阪神戦にしぼって今はPRをやってます。今後もそういう形でいろいろなものをやろうとしています。

3 . CS 日本有料放送スタート間近、期待と目標

記者：CS 日本の方も始まりまして、4月から有料課金開始ですね。「G+」と「電波少年的放送局」、そちらのほうのすべりだしも御覧になっていかがかなと。

萩原社長：3年で100万台、まあ、CATV 除いての話ですけど、これが一応目標ということです。現時点では、やっぱり受像機が、チューナーも含めて、ちょっと遅れましたんでね。普通受信契約に関しては、数字的には大きな数字ではありませんけれども、いよいよ巨人戦が始まるということなので、かなり、伸びてくれるんじゃないかな、という期待は持っています。

まあ、「電波少年的放送局」に関しても、地上波の本編中のPRを活かしたり、ちょっと様子見ないとわからないですね。やっぱり、受像機の問題とかなり大きく連動してますから。

久保メディア戦略局長：反響は大きいんですね。昨日、CS の見方みたいな番組告知とPR番組を極めて短時間やったんですけど、視聴率4.2%とりました。占拠率でトップで、CXさんの番組を凌いだそうです。会社とプラットワンに対して問合せが殺到し、電話が止まってしまいました。それから、現在も1日平均300件くらい、視聴者サービスセンターに問合せを頂いている。だから、問題はこれをどうやって実際の視聴契約、見ていただくための契約、ないしはケーブルテレビでも引き続き御覧くださいというご案内に結びつけるかということが課題になります。

氏家会長：アメリカと似ているんだよ、アメリカがデジタルが全国展開しないから、CATV がどれだけキャパシティーを持ってデジタル化できるかが焦点なんていわれてるでしょ。日本も段々そんな感じになって来たよ。

4 . 人権擁護法案の国会提出を受けての今後の対応(メディア規制3法案も含む)

記者：人権擁護法案、今日もシンポジウムとかありましたけど、今後どう取り組んで行くのかと

小林専務：今後の対応ですが、若干抽象的かもしないんですけど、とにかくやれる事は全部やると。今日のNNN24でシンポジウムを完全中継やってます。各社さんで取り上げてくれるものだとも思っております。そういうことや、あるいは

当然関係者、代議士の先生方も両方いらっしゃる訳ですから、それぞれ、3法案筋道が違う訳ですけれども、よく筋を読んで考えていきたいなど。キーワードはやっぱり共闘ってことですね。共闘っていうのは、新聞社さんとの共闘、それからNHKさんとの共闘。本日のシンポジウムも3者の共同になっておりますし、この間の反対声明も3者の合同の声明になっています。今度の対応っていうのは、共闘も含めて、やることは全部やる。というのがひとつ。あとはですね、ねばり強くしつこくやるしかないと。昔は法案ができるまでが勝負っていわれてましたよね。しかし、そこでやめたらダメなんで、まあ、審議の過程で変更できるような手も出てきたし、それから審議の過程で、答弁もございますけど、その答弁の中で言質をとる。かりに、法案が法律になったとしても、それを実施する時に、関係省庁がマニュアルを出すんですけど、必ずこれマニュアルを出すんですが、そのマニュアルを監視して、さらに、見ていくという。

最後の最後まで絶対あきらめないで、もう不退転の決意っていうと大げさですけれども、とにかく粘り強く最後まで頑張ると。

氏家会長：これからは、諸君と我々の問題。メディア全体の問題だという事を是非自覚していただきたい。僕の方からのお願いです。

5．地上波デジタル放送の見直しについて。

記者：地上波デジタルの問題なんですけども、遅れるとか遅らせないとか、いるないんじゅないかとか、いろんな外野の声が出てますけれど。

氏家会長：デジタル化というものについて、いろいろの批判、またそれについての批判が出てくるところで、デジタル化のやり方ってものがね正常な軌道に乗るんだ。デジタル化の流れってものはね、世界的な流れですからね。これは、誰がなんていあうと押し戻すわけにはいきませんよ。電波の効率利用ってことなんだから。ただ、その過程でね、いろいろなトラブルが起こるから、今問題になっている。

だから、こういろいろな反対論なんかが出てくれば、じゃあ、この反対論に対してどう対処するかといった、考えもすぐやらなくちゃいけないし、それで、最も妥当な形のデジタル化推進ができるだろうと思う。

結果的にデジタルの方向に流れて行くってことはもう、これは必然の流れですから。歴史の流れみたいなものだからね。そういう考え方で処置すればいいと思いますよ。

7 . NHK のインターネット利用問題

記者：NHK のインターネットで、具体的な内容が発表されましたけど、反対意見を述べられるお立場から。

氏家会長：あれは、私共は新聞協会と同じで反対です。

この前も申し上げたかもしれませんけども、確かに新聞業界の特に地方紙の方はね、地元でネットなんかやってごらんなさい。NHK は全国的に巨大組織のネットを張れる訳だからね。だから、危機感を持つのは当然のことですよ。私はそう思うね。そういうところまで、きめ細かく NHK は考えるべきだと思いますよ。

8 . 民放連会長四選について

記者：民放連の役員が決まりましたけど、氏家さんが当初おっしゃった体制作りみたいなことは、できたという評価なのかどうか。

氏家会長：私は、緊急対策委員会の中の幹事会を作ることが、最大の狙いだったんです。日枝君に譲るにしても、日枝君一人では絶対できないのはわかっていたから。僕一人でも出来ないから、本当にアップアップしてたからね。

体制を作って彼に譲ろうとしていたんですよ。体制だけは今作ろうと思っています。幹事会っていうのは、作ったのはそういうことです。これまで、僕が自分の手勢とうちのネットワークを使って、例えば政治家だの、地方の選挙区と話をするんだ。これじゃあね、とてもとても会長社になったネットワークっていうのは、息切れちゃう。これからものすごいんだから。今の3倍も5倍も出てくるんだから。

9 . その他

記者：さきほどのデジタル化の件ですけども、東京タワーから、フルパワーで、2003年流すのが、ちょっと厳しいということですが。

氏家会長：これは出しにくいと思います。ただ、試験放送と本放送っていうのがどういう差があるかっていうのが問題であって、出力を少し下げてやる本放送と、

いってもいい訳ですよ。やはり少し、ステップバイステップでいかないといけない。デジタルとアナログとの電波系干渉は、実は流してみないとわからない。一応出してみて、問題が起こったらそれに対応していくという形が最も現実的なんじゃないかな。

ただ、最大の問題は北関東にどれだけ投資をするか、今度総務省と NHK と我々とで地域分担しまして再調査やります。

その結果でアナアナ変換の技術が、あるいは人件費がどれくらいになるか出てくる。

以 上